

島原万丈 (LIFULL HOME'S 総研 所長) が聞く“寛容社会” Part01

“違い”よりも“同じ”を見つけよ 出会いが育てる多文化共生

日本の住まい方、とくに集合住宅においては、近隣とのコミュニティが希薄である。

そんな日本の社会で外国人居住者と多文化共生を図るにはどうすればいいのか。

彼らと理解しあうためには何が必要なのか。

外国人受入れ政策、人口政策を専門とする鈴木氏が提唱するのは「出会いの大切さ」。その真意を問うた。

鈴木 江理子氏 (国士舘大学 文学部 教授/博士(社会学))



一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。博士(社会学)。NPO法人多文化共生センター東京理事、NPO法人移住者と連帯する全国ネットワーク副代表理事、公益財団法人かながわ国際交流財団理事等を兼務。『外国人労働者受け入れを問う』(岩波書店)、『東日本大震災と外国人移住者たち』(明石書店)、『非正規滞在者と在留特別許可』(日本評論社)、『日本で働く非正規滞在者』(明石書店、平成21年度沖永賞)など。

島原万丈 (以下:島原):まずは、日本の移民政策の現状はどうなっているのかについてお聞きします。公式には移民は受け入れない方向性を明確にしてきましたが、議論は受け入れるor入れないに終始し、しかも各々が別の次元で争っていて、推進論と反対論ががみ合っていない印象です。議論を進めていくには、どういう対話が必要なのかという論点がひとつ。そしていかに共生していくのか。先生が研究を重ねられているあたりのお話をお聞きできればと思います。

鈴木江理子氏 (以下:鈴木):まず、「移民」という言葉と「外国人」という言葉があります。移民はそもそも日本がまだ貧しかった時代に、北米や南米などの海外に出て行く人に対して使われていましたが、受入れ国になって以降は、移民という言葉はほとんど使

われていません。移民の定義というのは、フランスのように明確に定義している国もあれば*1、日本のように明確な定義がない国もあります。国連の定義では、通常の居住国を12カ月を超えて離れて住んでいる人をinternational long-term immigrant/emigrantと定めているのですが、immigrant/emigrantを「移民」と訳すか「移住者」と訳すかでかなりニュアンスが違ってきませんか？

島原:確かにそうですね。

鈴木:ただ、近年の議論の中で私は、「外国人の中の定住化している人たち」を移民と広義で捉えています。アメリカのように最初から永住権を付与して入国ゲートでイミグランツとノンイミグランツが別々になっているわけではなく、まずは外国人として入国

します。日本の政策では、在留期間が付与されて、それを超えて在留しようとする場合には、在留期間を更新したり在留資格を変更する必要があります。

還流型と定住型

鈴木:近年批判的に議論されている技能実習制度*2というのは、在留期間の上限があり必ず帰らなければいけない「還流型」です。これに対して「定住型」と呼ばれる人たちがいます。定住型というと、一度受け入れたら無条件に日本にずっといられるとイメージしてしまうかもしれませんが基本的には在留期間があり、一定の要件を満たせば更新できます。たとえば留学生として入ってきた人が、学校を辞めてしまえば、通常、更新ができません。

※1 フランスでの移民の定義は、外国で生まれ出生時にフランス国籍を持っていなかった人とされている。

※2 「技能実習制度は、我が国が先進国としての役割を果たしつつ国際社会との調和ある発展を図っていくため、技能、技術又は知識の開発途上国等への移転を図り、開発途上国の経済発展を担う「人づくり」に協力することを目的としております。技能実習制度は、外国人が出入国管理及び難民認定法別表第1の2の表の「技能実習」の在留資格を持って日本に在留し、技能等を修得する制度で、平成5年に創設されました。」(厚生労働省 施策概要より)

せん。要するに、国家が定める一定の要件を満たせば期間を更新したり、在留資格を変更したり、あるいは、永住を申請したり、日本国籍を取得することもできます。

島原:日本にいる期限が決められているのか、更新していけるのが、還流型と定住型の違いですね。

鈴木:もう1つの両者の大きな違いは、定住型は家族を形成できることです。還流型は基本的に単身なんです。家族は母国に置いてきてくれ、と。生産活動と再生産活動のうち、再生産活動をできる限り日本に持ち込ませないようにするのが還流型のひとつの特徴です。定住型というのは、再生産活動も引き受けることになります。家族もあるし、子供がいれば日本人の子供たちと共に学ぶということになる。怪我もすれば年もとる。それらライフサイクルに応じたさまざまな活動を、受け入れる可能性のある人たちなのかどうか。その議論の際に、日本では「永久に受け入れるのか or 必ず帰ってもらうのか」という、極端な二項対立になっているので、そこを少し整理したほうがいいと思います。

島原:なるほど、そうですね。

鈴木:そもそも現在、日本にいる外国人たちはどういう人たちか?たとえば、先ほどの国連の移民、移住の定義では、1年以上滞在している人ですので、日本にいるほとんどの人が移民、移住者になってしまいます。実際は、在留期間に制限がない、永住資格を持っている人が46%、永住資格はなくても就労に制限のない人たちは6割強と、定住化が可能な人たちが非常に多い。1割程度が還流型といわれる技能実習生です。

島原:その現実を見ないまま、日本は移民を受け入れていないという議論がありますが。

鈴木:ええ、そもそも朝鮮半島などの旧植民地出身の人たちは戦前から日本で暮らしていますし、その後インドシナ難民や中国帰国者の人たちが来日し、80年代後半以降、いわゆるニューカマーと呼ばれる人たちが増加します。現在、その多くが家族を形成して日本社会の中で生活基盤を持っているということにまず目を向けないといけません。移民という言葉を使うか使わないかはどうでもいんです。移民政策という言葉が独り歩きしてしまうと、彼/彼女たちの存在が見えてこない。単なる労働力としてコンビニや居酒屋にいる外国人で終わってしまう。でも、コンビニで働く彼/彼女たちには家族がある、あるいは一人ひとりの将来の夢がある、あるいは親族があったり友人があったり、さまざまな活動をこの社会の中で行っているということまで思いを馳せられるかどうか。人間としての背景に対して想像力をめぐらせば、ある意味では私たちと変わらない人間であることが分かります。

島原:やはり移民という言葉のハードルの高さがあるのかなと感じるのですが。

鈴木:あるのかもしれないです。一方で、研究者やNGOはわざとそれを使って現実を見てもらいたいという意図がある場合も考えられます。

地域と移民

島原:今回のレポートで私がイメージしている多文化共生とは、「私たち地域住民」と言ったときに、そこには外国人も含まれてい



るという状態になること、それくらいがリアルなところに近いのかなと思うのですが。

鈴木:「地域」と「移民」ってなかなか結び付かないですよ。国、国家という枠の中で移民を語るのと違い、地域社会と移民ってピンとこない。地域社会の視点からアプローチするならば、同じ住民でありながら、外国籍である場合もあるし、日本籍だけれど外国にルーツを持っている人もいます。最近のタレントさんを見ても、多いじゃないですか。日本人なのになんであんなに顔が小さくて足が長いって(笑)。

島原:スポーツ選手なんかもそうですね。

鈴木:そうそう。いまは国民の意識も変わってきていて、日の丸をつけたオリンピック選手にもいろいろなルーツの人がいることをごく自然に受けとめています。そんな中で、違いを認めることも大切だけれども、同じであるという部分を見ていかないといけないと思います。たとえば、外国にルーツを持っている人たちが言われて嫌なことの一つとして、「これ食べられる?」とか「納豆どう?」とか、「お箸使える?」とか、いつまでたっても違うところだけを強調するような会話が終わらないこと。ではなくて、同じテレビドラマを見た感想を言い合ったり、サッカーと一緒にやったり、同じ土俵の中で生活しながら、違いや好き嫌いに気づいていけばいいことであって、必ずしも違うことだけを強調する必要はないと思います。



島原: 実際は違いを知って認め合うというアプローチは多い気がします。

鈴木: ええ、これまでの国際交流イベントなどでも、「違いを知り合おう」という視点が多く見られました。たとえば、民族衣装に身を包むことで文化の違いを強調してそれを楽しんだり。でも、それは博物館的な楽しみ方ですよ。それが間違っているとは言わないし、そういう面白さが入口であってもいいけれど、本人からしたら、実際こんな着てないよ、こんな歌なんか私たち知らないよ、というのが本音。結局は、同世代・同じ趣味の人たちがつながるような交流の方が自然です。「近頃の若い者は」という年配の人の感覚は国籍や民族が違ってても同じです。非日常ではなく日常的に暮らしながら、共通することや違いに気づいていくほうが大切だと思うんです。そこでは、片方が一方的に歩み寄るのではなくて、両者が歩み寄ることが必要なんです。

島原: 自分の経験からもなるほど、と思えますね。マスコミなどに外国人の問題が取り上げられるときは必ずといっていいほど、人口減少に伴う外国人受け入れ政策といったマクロな経済、人口問題として取り上げられることが多いのですが、地域で起こっているフリクションはそのレベルではないような気がしています。

鈴木: 自然増減の自然増は望めないから、社会増減の社会増という側面で海外から人を呼び寄せるというのは人口政策としてはありうると思います。ただ、それは国境管理の国家が行うことであって、地域住民を選ぶ権限は自治体にはありません。そうすると、人口

減少だから外国人を呼ぼうとしたところで、日本人が嫌がる地域は外国人も嫌うんですよ。第三国定住によるビルマ難民受入れの例ですが、最初の一定期間は新宿で初期指導を受けるんですね。その後、定住先として手を挙げた地域に入るのですが、やがて地域から出て行ってしまう人が多い。地方だったんです。同国人もいないさびしい地方での生活はつまらないといって、せっかくの受入れ先を離れてしまう。

島原: ただ、還流型の技能実習生はそれができないんですよね。

鈴木: 技能実習生は地域限定で事業所が決められているから、どんなに魅力のないところでも一定期間働かざるを得ない状況にあります。こちらからすると都合がいいのかもしれないけれど、ふつう意志を持った人間であるならば、気に食わない職場や住まいは変える自由があるはずですよ。人口減少への対応として外国人を呼び込む政策は必要だと思います。ただし、魅力がなければ彼／彼女たちも出て行きます。過疎の自治体の中では、外国人を受け入れたいということころも、かなり少数ですがあります。でもそれは、惹き付けておくだけの魅力をその街が持ち続けなければ、日本人の若者が出て行った街は外国人にとっても同じです。暮し続けたい街かどうか、暮し続けたい街に変えられるかどうか。それは、結局日本人を惹き付けるのと同じなんです。

技能実習制度の実態

島原: 特に技能実習で移転や仕事の変更が

できないなんて、外国人で技能実習生なら基本的人権がなくてもいいのかって、突っ込みを入れたいところです。これまでの技能実習制度ではいろいろ酷い問題も起きていて、さすがに改善も図られたようですが。

鈴木: 「技能実習法」という法律が11月に制定されたもの^{※3}、これまでの問題を改善できるかどうかは疑問です。

島原: いまどきネットでいろんな情報が発信される時代です。違法な実態が拡散されれば、技能実習生も来てくれないという状況も十分ありえるのではないのでしょうか。

鈴木: ちょっと前に『WEBRONZA』でも技能実習制度について書いたのですが^{※4}、この制度が適正に行われていないことは、技能実習生の質の低下にもつながると危惧されています。それぞれの国が一定の経済発展を遂げれば、その国の中で自己実現ができる人はもう日本には来ない、あるいはより良い国を選ぶようになりますよね。

島原: 来日する外国人の質が低下すれば日本人の中にも外国人に対する拒否反応が起こってくるかもしれないですね。ただ、それは日本人が招いたことかもしれません。

鈴木: だから、日本人が歓迎をしていることを伝えることで、彼／彼女たちの行動様式は違ってくると思います。私たちを受け入れてくれる社会、会社だと認識されるのと、あくまでも労働力として利用しようとするのでは、相手の態度も変わってきます。それは日本人同士でも同じ。人と人との出会い、地域と人との出会いもそうだと思います。

島原: 来る側はとりわけ雰囲気敏感ですから、ガードが固くなりますよね。

※3 「外国人の技能実習の適正な実施及び技能実習生の保護に関する法律」は2016年11月公布。2017年11月1日施行予定。これにより最長3年の技能実習生の制度が条件により2年間延長され最長5年となる。

※4 『WEB RONZA』2017年01月09日(朝日新聞デジタル)「技能実習制度」の再考を「国際貢献」という名の労働力供給システムを問う <http://webronza.asahi.com/national/articles/2017010300001.html> (※一部有料)

※5 1975年、人口増加に対応するため愛知県豊田市に開発されたマンモス団地。1980年代後半から出稼ぎの日系ブラジル人をはじめ南米出身者が多く住み始めたことで、住民とのトラブルに発展、対立が激化し暴動寸前となった。詳しくはプロローグの第3章「3.バンリュー化する日本」参照。

鈴木:外国人が云々というよりも、ホスト社会・ホスト住民の側がどう手を差し伸べているかによって、全てが解決するとはいえませんが、変わることは大きいと思います。

島原:外国人問題を突き詰めると、実は日本人問題じゃないかという気はすごくしています。たとえば、やはり外国人お断りの不動産の風習は多少なりともあって、それも話を聞いてみると単純にゴミの問題と、音の問題、その2つに終始をしているんです。それくらい注意すればいいという、ごくごく単純な話すらしないまま、外国人ひとくりにしてダメとなるのは、日本人の心持ちの問題、その中には差別的な意識がないとも言えないかもしれません。そういう部分と移民という言葉が持っている大きなインパクトが、外国人に対する否定的な見方を加勢しているような気がしています。

鈴木:ひとつに、正しくはないけれど「単一民族国家」であるという神話的な意識が、いまだ日本人の中に存在するのだと思います。そういった先入観、偏見がある中で、私たちが変わる瞬間があります。それは出会いな

んですよ。実際に顔の見える出会い、ひとくりの外国人として中で顔が見えない状況ではなく、誰々さんという顔が見えた時点で、同じ人間レベルになるのであって、そう考えると最初の出会いはものすごく重要です。

寛容の許容量

島原:豊田市の保見団地の話^{※5}は受け入れる側も入った側も両方問題があったという意見もあります。

鈴木:結局、出会いなので、どちらが悪いということではないと思います。つまり、一人ひとりの人間には住む場所や働く場所を選ぶ自由があるということが大前提で、ただし特定のグループの人たちが突然大挙して押し寄せてくる、それに対して住民は全く心構えもないという状況では問題が起こるのは確かであり、大人数だとそこでグループができて生活が完結してしまうんです。ひとりふたりだったら必然的に地域の人との接点や交流ができ、団地での生活をスムーズにしていけるのかもしれないけれど、50人の集団だと、自分たちでなんとかする、困ったときも自分たちで解決できるとなってしまう。日本人対ブラジル人という集団の構図になってしまうと個としての出会いがなくなるのです。

島原:難しいところはありますよね。現実になぜ、団地の半分が外国人というような状況が起きるのか

は、URや市営団地だと入居差別がないために、一般で断られた外国人も受け入れられるという面もあります。先日取材した芝園団地(P137参照)でもやはり元々の住民の方たちは、URに外国人は3割くらいまでと要望出したけど、一気に増えて、いまは中国人が半分になっています。

鈴木:いろんな団地でそういう要望が出ていて、また、要望を出すこと自体が差別ではないのかという議論も出ています。私も上限を決めることは差別に当たるとは思っているんです。ただし、受入れには許容量があるのも事実です。保見団地の場合、あまりに空き部屋が多いのでURが派遣会社に貸したという事情があり、住民の心構えのない状態での不幸な出会いだったと思います。結局、国家が勝手に開けた扉なんですね。日系南米人の人を優先的に受け入れるなんて聞いてないと言っているうちに、国家が開けた扉によって外国人が一気にひとつの地域に集中してしまったということで、それは国家の責任も大きいと思います。

島原:私は豊田市で行なわれた街づくりのワークショップにオブザーバーとして参加したことがあるんですが、街づくりをしているような集団にもまったくブラジル人に興味がない、まるでいないような扱いになっていたのに違和感がありました。

鈴木:そうそう、派遣請負という形だと、同じところで働いていてもラインが違うと職場でも住居でも接点を持たないまま、知り合う機会もありません。エスニックコミュニティというのは、国境を越えて生活する人たちにとっての、ある種の相互扶助的な組織でもあ



—— 私自身も外国人と過ごす中で、寛大になったと思います(笑)。

慣れって、私は大事だと思っています。(鈴木)

—— イメージしている多文化共生とは、

「私たち地域住民」と言ったときに、

そこには外国人も含まれているという状態。(島原)

り、後から来た人たちの受入れ国での生活を支援するという点でも重要なのですが、それが閉じてしまうと非常に問題。なので、開いた状態にさせるという働きかけが必要です。行政はコミュニティリーダーを養成したがるんです。リーダーをひとりつかまえて、何かあったらリーダーに言って、リーダーを窓口コミュニティに働きかける。それは、行政的な効率性からいうとよいのですが、そうするとその人ひとりしか開いてないですよ。あとの人は閉じた中に入ったまま。それって外からは問題が見えないという、すごく危険な状態です。

島原: どういう状態が理想だと考えますか?

鈴木: 閉じさせるのは私たち社会の側の問題でもあるわけだから、閉じさせないような働きかけは重要です。開いていて接点があり、その中で気が合う人、違うけれど同じ部分を見つけれられた人たちが交流できるすき間があれば、全員が仲良しである必要もないと思います。そして、一カ所に固定せず、常にアメンバー的というか、こちらの集団から動いて今度はそちらとつながる、というように自由な動きで周りにつながっていくことも大切だと思います。

島原: 確かに。いい出会いが必要であること、開かれた状態でエスニックコミュニティが動いていくこと、2つのポイントがあるわけですけど、いい出会いはどうやって作っていくのか。先ほど、自治体やなどの古典的な国際交流のやり方にはそぐわないものもあるとおっしゃっていましたが。

鈴木: ひとつは、同じ目的を持った集団の中にいること。たとえば学校。小・中学校というのはすごく大切な場だと思います。ただしそこでの出会いを間違ってしまうとイジメや差別につながります。だから学校の先生の役割が非常に重要で、違う友達との出会いがお互いを豊かにするものだということをいかに伝えていけるか。同じことを同じ目的を持って一緒にできることが重要だとすると、会社も同僚として出会えればいい出会いのひとつですよ。でも派遣とか請負のように閉じた状態で、名前ではなく「派遣さん」と呼ばれるような中では交流は生まれません。

島原: 自治会も少し難しい世界ですよ。

鈴木: 地域のお祭りにしても、少しずつ小さな仕掛けが大切です。イベントの場合、非日常の出会いなので明日はもう知らない人になっていたりする。だから、イベント当日だけ顔を合わせるのではなく、イベントを一緒に作って行く中で出会うのはよいと思います。よくないのは、日本人が企画を全部手掛けて、最後にブラジル人にサンバを踊らせるとか、シュラスコを作らせるとか。それはすごく失礼です。作る過程から一緒にやることは決して簡単ではありません。考え方も段取りも違うし、言葉も十分伝わらない。でも、それを拒否していたらいつまでたっても日本人だけでこの社会を作っていくしかない。でも私からしたら、それってすごくつまらないような気がします。

島原: さきほどおっしゃった、エスニックコミュニティに対する許容量の問題は何か解

決策があるのでしょうか。

鈴木: 外国人の割合というより、速度なんだと思います。たとえばマンションの住人が外国人になるのが、ゆっくり5割になると、ある日突然5割に達するというのでは、受けとめる側の意識が全然違う。保見団地はある日突然増えてしまったという状況があって、そのときにどうやって人権というものに配慮した形でコントロールできるかが非常に難しかったと思います。ヨーロッパの国では移民の子供たちを通わせる学校を分散させることもあります。なぜなら集団化することでホスト社会の子供たちとの交流がなくなり、ホスト社会の拒否反応につながるから。ただ、分散させることを政策としてどこまで行うことができるかは、難しいですね。

多文化と多分化

島原: 今回の調査アンケートを見ていくと、日本人の空気として、いまの時代代表立って反対とか拒否という方はあまり多くなくて、居てもいいけど私は関心がないと。現実的にはA棟は外国人用、B棟は日本人用というふうに分離したほうがいいのでしょうか。

鈴木: 多文化は間違えると「多分化」になるんですよ。いまのA棟、B棟もそうで、外国人の文化は尊重しましょう、だけどそれはA棟内に限るということですよ。いくら国境をコントロールしたとしても、国境通過後、彼/彼女たちが働き、住む場所は、特定地域に偏ってしまうこともあります。そうしたと



きに、住民だけでは解決できないこともあると思うんですよ。地域は地域住民が作るわけ、住民だけでは解決できなかったときにこそ、公的な関与は必要だと思います。それは、制限するのではなくいかにそこでの摩擦を減らしていくか。当初、豊田市は何も関与せず、保見団地はずっと放っておかれたわけです。たとえばゴミの捨て方が困るんだったらポルトガル語の冊子を作るということをしていれどいぶん違ったわけだし、あるいはかつての日本人移民の子孫が来日し自由に働けるという制度について知らせるだけでも全然違ったと思います。

島原: そうですね、同じ豊田市の産業を作っていくということを知らせるべきだったと。たとえば、外国人留学生に賃貸アパートを貸している会社も、やはり音の問題もあり、日本人とフロアを分けたりします。これは日本のアパートの壁が薄いということが問題ではあるのですが、分けてしまう。そのほうが問題が起こらないという解決の仕方が、ある意味でノウハウになってしまっているんです。分かれて「多分化」のほうにいく解決法が横行しそうな雰囲気もあります。

鈴木: 階を分けることは悪いわけではないけれど、それをそこで固定化してしまうのはよくありません。たとえば、エレベーターにいろんな言葉で「こんにちは」って列挙してあると、一緒になったときに「あなたの国の挨拶はどれ?」って話ができるようになりますか。

島原: とくに賃貸の集合住宅では住民同士がコミュニケーションする場がないですからね。

これは、日本の住宅の問題でもあるので、そのあたりも変えていけたらなと思っています。

鈴木: そうだと思いますよ。同じ人間だということが感覚として理解できれば、たまたま国籍が違うだけだということに気づきます。

「慣れ」と「まなざし」

島原: 今回、外国人との交流において寛容な人たちやその状態というのは、日本人全体に対しても寛容なのではないだろうかという仮説を持っているのですが。

鈴木: それはそうですね。ここまで言えるか分からないですけど、あえて外国人住民という、目に見える形で違いを持った人たちを受け入れることを訓練することによって、同じ日本人に対しての違いに関しても寛容になれるといいと思います。確かに私自身も外国人と過ごす中で、遅刻することに寛大になったし、何かあった時のえっと思うような「言い訳」にも寛大になったと思います(笑)。ああそうなんだって。本来、あまりいい言葉ではないですけど、私がよく使っているのが「慣れ」なんです。人はいろんなことに慣れることができる。それは食べ物の違い、食べ物のニオイにも。最初はウツって思ったのにも慣れるものです。外国人が珍しかった時代に育った年配の方は、若年層に比べて慣れていないだけなんです。慣れて、私は大事だと思っています。

島原: そうですね。特段に何か世の中で変わった動きがあったわけじゃないですけど、外

国人に対して寛容な人も時系列で増えている気がします。

鈴木: 外国人が珍しかった時代に比べたら今の日本は変わったはずですよ。たとえば隣の席で中国語で会話していても違和感ないですよ。旅行者ではない、明らかに居住者であろう人が話していてもあまりなんとも思わなくなった。アパートにいろんな言葉が氾濫していても気にならなくなってきた。その慣れを肯定的に見てもいいんじゃないかなと思います。変に押し留める、制限するのは慣れに対して逆のベクトルを作ってしまうことになります。

島原: 慣れ、単純なようで奥深いですね。先生のお話を聞いていると、問題は多々あれど、寛容な社会を作ることはそんなに難しいことじゃないじゃん!って思えたのですが、なかなかそうもいかないのでしょうか。

鈴木: 私は簡単な話だと思っているし、簡単に考えればいいと思いますよ。

島原: 政府があちこちに気を遣いながらホンネと建前を使い分けているうちに事実上、外国人居住者は増えている。ここにいろんな問題の根っこがある気がします。

鈴木: 「外国人」という名前を持たない人ではなくて、一人ひとりの人間なんだという実態をしっかり見るのが大切です。

島原: 要は「慣れ」。今日のこの言葉が大切なヒントになりそうな気がします。ありがとうございました。

